

文教福祉委員会

令和3年1月19日（火）

午後1時31分～午後3時45分

議会大会議室

【出席委員】池田正弘委員長、永渕史孝副委員長、富永明美委員、久米勝也委員、
重田音彦委員、川崎直幸委員、山下明子委員

【欠席委員】嘉村弘和委員

【委員外議員】なし

【執行部出席者】なし

【案 件】

- ・佐賀市視覚障害福祉協会からの意見聴取
- ・視覚障がい疑似体験

○池田委員長

それでは定刻を過ぎましたので、ただいまから、文教福祉委員会を開催いたします。なお、本日嘉村委員については欠席されるとの連絡が入っておりますのでお伝えをいたします。

今回は、佐賀市視覚障害者福祉協会の皆さんとの意見交換会ということになっております。それでは、開会に当たりまして一言御挨拶を申し上げたいと思います。私は本佐賀市議会文教福祉委員会の委員長をしております、池田正弘でございます。どうかよろしくお願ひ申し上げます。一言御挨拶を申し上げたいと思います。

◎池田委員長挨拶

○池田委員長

それでは続きまして、佐賀市視覚障害者福祉協会会長から御挨拶をいただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

◎佐賀市視覚障害福祉協会会長挨拶

○池田委員長

ありがとうございます。それでは議事に入ります前に、自己紹介を行いたいと思ひます。まず文教福祉委員会のほうから自己紹介を行った後、佐賀市視覚障害者福祉協会の皆さんに、紹介をお願いしたいと思ひます。

◎自己紹介

○池田委員長

それでは全員終わりましたので、議事に入りたいと思ひます。議事の進め方につきましては、まず佐賀市視覚障害者福祉協会から説明をいただき、委員の皆さんから質疑を受けたいと思ひます。その後、視覚障がいの疑似体験を行った後、協会の皆さんと文教福祉委

員の意見交換という流れで進めたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、次第に入りたいと思います。まず、事前に協会の皆さんにこういった説明をお願いしたいということによっておりました、視覚障がい者についての概要、日常生活における困っている事項、コミュニケーションに関しての要望をお願いしておりますので、まずその辺から、協会の皆さんに説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

◎佐賀市視覚障害者福祉協会説明

○池田委員長

ありがとうございました。今、4人の方からそれぞれの生い立ちなりを語っていただきました。いろいろ点字のこと、また音声のこともありましたけども、なかなかお話ししづらいと思いますので、委員の皆さんからいろいろ質疑、質問をしていただいて、それに答えていただくという形にしたいと思いますけども、よろしいですかね。

(「はい」と呼ぶ者あり)

それから、今日はコミュニケーションについて特に御聞きたいことも多々あると思いますので、委員の皆さんから、そういった観点から質疑をしていただければと思います。

○山下明子委員

ロービジョンの概要のところ、もうちょっと御説明をいただけるといいのですが、中心だけが見える場合と周りだけが見えるとか、いろいろあるじゃないですか。そこら辺を少しお話しただけじゃないでしょうか。そのときにどういうふうにか何か声をかけられるとかいとか悪いとかというのがあれば、もしよければお願いします。

○視覚障がい者団体

ロービジョンの方の視覚障がいの種類、病気によって、ちょっといろいろ違うと思うのですが、中心だけしか見えない方もいらっしゃる。私の場合は焦点が定まらないということなので、1番、例えばスーパーとかいっても何がどこにあるというのが全然探せない状態です。行き慣れてくると大体今日用品はここか、食料品はここかというのがありますが、お買い物に行くと料金が見えない。だから、ついつい手にとって目を近づけてみると、ちょっとこう、少しひんしゆくじゃないですけど、そういう経験もありますし、1番の問題はやっぱり視野が狭いということなので、目の前のものは見える、例えばここにお湯のみがあるというのは、お湯のみがありますよということでお伺いしたから、お湯のみという認識ができるのですが、ぱっとここに座って、この目の前にお湯呑みが置いてあったときに、近づいたらお湯のみなんだというような、そういったふうな見え方という点ですかね。あと中心視力の方は、私はちょっと物事が、ものがはっきり見えない。ぼーっと少し白い幕がかかったような見え方をします。あと線が認識できない。例えば漢字だったら、上を突き出しているのか、してないのかとか、そういった見え方です。あと物がピュンと飛び出してきたときとか、もう全く駄目。

○佐賀市視覚障害福祉協会

ちょうど今の御質問にあった体験を……。歩行訓練士の方が言っておられたのが、この体験は3度から5度ぐらいの視野のものであるということ、視野が狭いという体験も後でしていただきたいと思います。それと、中心線が、ぼけるという体験も多分していただけたらと思います。もう一つ、資料をいただいているというか、お預かりしているのが、元柳川リハビリテーション病院の眼科の医者で、網膜色素変性症で狭くなった視野をどれだけ広く使えるか。そういうリハビリとかもされていて、その方が書かれた資料をちょっとお預かりしてきているので、後で読んでいただければと思っております。

○池田委員長

よろしいですか。ほかにはないでしょうか。

先ほど情報を得るのは、とにかく音声が一番ということでありました。佐賀市のいろいろな資料にも、音声コードがついた書類が今出ておりますけれども、そういうのがきちんと皆さんのところに行き渡っているのかどうか。ちょっとそれを教えていただきたいということと、いろいろなそういった行政が多数、文章に音声コードをつけたときに、皆さんその読み取る機械がいるわけで、その機械の普及が進んでいるのかどうか、これは日常生活用具の支給対象にもなっていて、1割の負担で購入できるということなのですけども、そういったものの普及状況がどうなるのか、その辺もしお分かりでしたら教えていただきたいと思うのですが。

○佐賀市視覚障害福祉協会

今さっき、おっしゃられたこと、10年ぐらい前だったと思うのですが、ワード文章のワードにそれをつけて、それで文章を書くときテルミーという活字読み上げ装置がそれを読み取ってくれます。確かに読み取ってくれました。それで、市役所のほうからも勧められましたし、僕も実際持っていますけど、思ったほど普及しなかったのですよね。もうちょっと普及するかなと思っていたのですが、何でだろう、何でだろうと、今もわからないのですが、結局何だろう。もう家族から読んでもらうからいいという人も多いような気がします。これは、佐賀の同行援護の利用率とか、そういうものを見ると、会員の中で「利用したら」っていうと、「いや、家族に連れて行ってもらう」「家族から連れて行ってもらえんやったらどうする」というと、「行かん」ってこういう返事が返ってきて、ちょっと正直言って困るというか、せつかくのものをと思うことが多々あります。それでテルミーも恐らく、特別操作が難しいと思わないのですが、例えば本を読んでいくと、あれ、何やったっけって途中で、読み直すことができるのですが、あれは多分、1回ストレートにぴゅーって終わりまで読まないといけない。聞かないといけない。そういう部分があって、操作性というか、もう一つ、なじみがなかったのかなあと僕は思うのですが。確かにきちっと読んでくれますから、いいと思うのですが。

○佐賀市視覚障害福祉協会

テルミーのことですけれど、ちょうど私がこの視覚協の会長をさせていただいたときに、そういうふうな普及のあれがあったので、自分たちの文書、視覚協からの会員への文書等には、そのテルミーのあれにコードをつけて、読んでいただくようにしたのですよ。だけど、それだけでは足りないじゃないですか。今委員の方からも役所の文章からと言われたのですが、あんまり見たことないのですよ。実際言えば、役所からの文書にテルミーがついて、コードがついたのを、見たことが少なかったもので、自分も実際持って知っていますけれど、ちょっと壊れたんでもうそのままにしています。それよりもまずほかのパソコン系のあれで、今読ませたりなんかはしているのですが、スキャナーでスキャニングして、そういうふうな利用の仕方をしているので、今は実際にテルミー使っている人……。

○佐賀市視覚障害福祉協会

ワードがバージョンアップしていく中で、やっぱりそれは対応できなくなっている可能性があるなと思っています。あのころがワード2002, 2003ぐらいだったのですが、2013からごろっと変わったんですね。そのとき以降に、あんまり聞かなくなったので、ひょっとしたら、そこら辺から、コード読み取りがついていけないのかなあという気もします。全く、別物みたいな操作なんですよ。

○池田委員長

ありがとうございました。役所から来た文書というのは、同居されている方があれば、読んでいただくということですが、もしひとり暮らしであったりとか、そういう場合にはどのようにしてその情報をやられているのか、わかりますか。

○佐賀市視覚障害福祉協会

一人暮らしです。一応、届いた封書、はがきというのは、一まとめにしておいて、ヘルパーが見えたときに読んでいただくのですが、それこそ今、副会長が言った、テルミーの頃に市役所からの文書が市役所からと分かるようにできないものですかということで。簡易点字、名前は忘れましたけど、点字が知らない方でも打てるやつがあるんですね。それで、その封筒の端っこに、佐賀市役所障がい福祉課と書いてあったので、これは障がい福祉課から来たのかと思って、別にとってこう、なくしたり、捨てたりしないようにということをしてたのですが、今パラフィンですかね。市役所から来るね。パラフィンみたいになって、これが市役所からのものかっていうことで、とっといたらほかの、例えば、電気屋とかからもその同じようなものが来るようになって、これは駄目だということ、ちょっとね、本当言うと、市役所からとか中部広域連合から来る書類はそういう封筒に封書に点字で、差出人をしていただけると助かるなど非常に思っています。

○池田委員長

ありがとうございました。ほかに皆さんないですか。

○山下明子委員

今の例えば、お札の端っこにマークがあるような感じで、封筒に、佐賀市役所ならこう、

何かの印をつけておくとかいう形でもいいということですか。それとも、ちゃんと何か点字か何で打ったほうが良いということでしょうか。

○佐賀市視覚障害福祉協会

形をなしてくれれば、今さっき言われたような、お札のあの様な印でもいいと思うのですが、お札の印も言わせていただくと、さらのは分かるのです。少し使い込んでしわが寄ったりするとどれがどれかがわからなくなる、という部分があるのですよね。だから、そういうなんていう機械だったか忘れたけど、市役所と書いていただけるだけでもいいのかなと思うのですよ。市役所の障がい福祉課とか、市役所の保険年金課というのが、やっぱり市役所と書いていただけると、市役所からのものだとわかるだけいいかなと思います。

○富永委員

先ほどから、点字を覚えるのも大変なんだよということでおっしゃってしまっていて、私は視覚障がい者は点字だというふうにならざるを得ないと思ってしまっていて、何かそれが申し訳なかったなというふうに思っています。それで先日も聴覚障がい者の団体の方とお話をしたときに、私たちは、聴覚障がい者イコール手話ができると思ってしまうと、ただ実際には手話ができる人のほうが少ないのだということをお伺いしました。そこでお尋ねなのですが、視覚障がい者の中で、今現在で点字が大体できる人っていう、パーセンテージとかがもし分かるのであれば教えていただきたいなというふうに思います。

○佐賀市視覚障害福祉協会

配偶者が盲学校に勤務していたんですけども、その情報によると、前はほとんど点字を使用される方がいらっしゃったんですけど、最近の卒業生の方は点字を知っている方が、なかなか少ないと伺っています。

○久米勝也委員

ちょっと今の質問と関連しますけれども、視覚障がい者の方のサポートと申しますか、今日会長は盲導犬を連れていらっしゃって、先ほどの方々は、なかなか点字が難しいと。さっきの音声ガイドと。私たちもそのぐらいしかちょっと聞いたことないのですが、何かほかに視覚障がい者の方々にそういうサポートするような、何かがあるのかなというのがもしあったら、教えていただきたいのですけど。

○佐賀市視覚障害福祉協会

今のお尋ね、最初に昔は点字だけだったけどと、僕が言ったのが広がって来ているのです。確かに今、例えば読書に関しても、僕らが小さいころ、若いころはベストセラーが出ますよね。それが僕らの手に届くのが3年後ぐらい。だから、結局点字版を使って、点訳していただく。製本、編集製本として、出てくるのは二、三年後だったのですよね。それで、今は数カ月です。もしくは1カ月以内でも、テキストデイジーという方式で、パッと点訳して、デイジー化して、それで、サピエ図書館と言って、全国の視覚障がい者を対象とし

た図書サービスっていうのがあって、その中でアップされればそれは読むことができます。それと、デージー図書と言われるもの。普通のCDだったら精いっぱい詰め込んで80分なんです。それを、スピードを落としていって、何十時間も録音できるものがある。長い小説なんかでもそれで1枚で聞くことができるようになっていきます。これは辞書なんかでもそうです。ですから、超速の進歩をしていることは、実際事実です。そういう、情報の取得ということに関しては、もういろんな――、例えば市議会、ごめんなさい。市議会だよりもそうです。市報さがもそうです。一つは、六星館で点字印刷をして、あれ抜粋したんですけど、視覚障がい者に送られてきます。それともう一つが、CD。デージー図書としての、ほぼ全部をデージー形式で、視覚障がい者に送っていただいて、それで市報さが、市議会だよりも含めて、そういう情報を取得することができます。ですから、以前と比べれば超速の進歩です。ただ、すべてがそれに対応できていない部分というのがあるから、やっぱりまだまだこう皆さんと、同じ情報の共有というのが完全にはできてないということも事実です。

○永渕副委員長

聴覚障がい者の団体とのお話の中では、いわゆる子どもたちのときから、手話などを覚える環境というのが大事なのということに非常に力強くおっしゃっている経緯もございました。そういうところで、今日は視覚障がい者の皆さんに来ていただいているのですが、先ほども一般学校を途中で離れることがあったというようなエピソードが出ましたが、このいわゆる、その学校というか教育の中で、何かこう視覚障がい者の皆さんとして、教育界に対してこうしてほしいとか、これから、例えば見えない子どもたちに対して、こういうサポートがあると、もっと豊かになるとか、何かそのあたりの教育界に対して、何か御発言があれば、聞いてみたいと思います。

○佐賀市視覚障害福祉協会

理想を言えば、やっぱり本当は皆さんと一緒にやりたい。普通の幼稚園に行き、普通の小学校に行き、普通の中学校に行き、その中で視覚障がい者が、一般の方と共有できる視覚障がい者の人たちの、あるいは障がい者の人たちのスペースがあって、それができるのがすごく私は理想的だったのかなと思います。わざわざそういうことを、お互いに意見交換をしなくても、視野も全然違うし、もちろん視覚障がい者のことを理解していただくというよりも、多分健常者の方が、普通に視覚障がい者とか、聴覚障がい者の方を理解できると思います。だから理想的に、そうしていければ一番よかったのかなと思います。それで、私が1番、小学校3年生になる前に、幼稚園の頃から盲学校にどうですかという話はあったけど、小学校でみんなとかかわりたいと思ったときに、学力低下、それから、なかなか協調性が難しいというときにとられた判断が、学校の特殊学級に入れるか、盲学校に行くかの選択だったと思うのですよ。特殊学級、そのころ、私の今の年齢から言って60ちょっと前なんですけど、そのころは特殊学級に行くということは本当に特別視されて、

もう本当に違う世界に、こう入らせられるという、そういうイメージがあったので、だから、その同じクラスの中でも、例えば、前のほうに行って、黒板の字を書くとかもいいんですけど、みんなで見えない人がいるから、コミュニケーションのために、例えば、点字を学習しようとか、何かそういう、本当はそういう理想的な、世の中であれば一番いいのかなというのは、ずっと抱いてきた思いです。これは就職してからもそうなんですけど、弱視っていうこと。私の立場になると、中途半端なんですよ。こういう言い方するといけないんですけど、本当に中途半端なんですよ。見た目が見えると思われるから。本当に、ことごとくいじめにもあいます。できて当然のことができないことに対しての、すごい圧力もあります。そういう経験もしましたので、根本的にはやっぱり、認識をしていただくということに行き着くのかなと思います。でも、その中でも生きていかなきゃいけないから。だから、そこは本当に大事な事かなってというのは痛感しています。ちょっと説明にならなかったと思うんですけど。でも、幸い私はいろんなお友達恵まれて、本当にいい時間を過ごさせていただいているんですけど、すいません、お答えにならなかった。

○永渕副委員長

ありがとうございます。

○川崎委員

ちょっと盲導犬のピーちゃんやったですかね。今ねんねしているんですけど、盲導犬に関して、私もようわからんとですけど、失礼ですけど、他の方たちも連れてくる必要があったんじゃないかなと思うんですけど、今この盲導犬の、この皆さん方にどれぐらいおるのか、どういうふうにしたらこう指導されるのか、また先ほど言ったように、子どもたちも目の見えない人たちに対しての盲導犬の指導とか、そこんにきの空気がちょっとわからないものですから、これに対して、よければ御意見を伺いたいと思います。

○佐賀市視覚障害福祉協会

去年の3月31日時点でのことで言うと、盲導犬利用者はタンデムという――、例えば御夫婦で1頭の犬を利用するとかいうことを含めて、犬が909頭、利用者が930何人とかだっただと思います。九州の盲導犬協会から言うと30人、40人弱かなと思います。それで佐賀県では4頭です。佐賀市に1頭です。

(発言する者あり)

はい、そうなんです。盲導犬というのは、ほとんどのものをボランティアさんの助けを借りて、お産の場合から出産ボランティア、それから、40～60日ぐらいしたら今度は、約10カ月をパピーウォーカーという人たちが、これは人といるので楽しいんだよということを教えるため、いろんな経験をさせてあげるため、それから1歳になると協会に戻って、盲導犬になる訓練を始めます。初めはまだボール投げみたいな遊びから始めるみたいですけど、その中で段々と振り落とされていくという――、言い方がいいのかどうかはあれですけど、例えば、この子もぎりぎりなのですが、人が物すごく好きなんです。歩いていて

下手すると、自分の興味がある人が来ると、ピューッと横に行こうとするのですね。これが極端になると不適合ということです。だから、前の子は、すごく素直でいい子だったんだけど、すごく怖がり、歩いていて、猫からしっぽをかじられたのです。そしたらもうその部分に行かなくなるのです。だから、これがまた極端になると、これも向いていません。だから、仕事をするとき、指示されたことはできるのだけど、さあ始めようかというときブルブルって震えたりする犬がいたそうで、これも非常に優秀な犬だったので盲導犬には向かない。そういうことで、大体2歳になる時には、10頭生まれたうち3頭ぐらいが盲導犬として活動します。協会のほうは5頭、何とか半分の犬をとという目標はあるのですが、やっぱりなかなかこれは難しいみたいです。子どもさんは小学校3年から4年になると、例えば障がいという部分で、盲導犬のことを、今日学校で習ったりしてあるみたいで、僕もちょっと、成章中学校から、ちょっと遠いんですけど、東脊振小学校なんかにお話に行かせていただいています。非常に子どもさんたち、興味を持って。もう必ず先生おっしゃるのが、ほかの授業だったら寝たり、立ち上がってどっか行こうとしたりするのだが、盲導犬の話聞いているときはもう、おとなしく一生懸命ノートとっていますとおっしゃっていて、何かこの下手なしゃべりでも、そんなふうに楽しみにしてくれる子どもさんたちがいるというのは、すごくユーザーとしても励みになるのです。それで、蛇足で言わせていただくと、盲導犬が歩いているときには声をかけないでください、盲導犬に触れないでください、エサをあげないでください、目は合わせないでくださいとか、いろいろお願いするのですが、子どもさんは、ほぼ100%守ってくれます。ちっちゃい子が触ろうとすると、だめよ、盲導犬の仕事をしているんだから、触っちゃいかんよと言って。残念ながら中高年の方というのが、かわいかな、と言って触っていたり、ゴソゴソするので何ですかって、いや、おやつやろうと思って、やめてくださいって言うんですね。そういうマナーを守っていただかないと、残念ながら、やはり大人のほうが多いので、何か。だから、これが、あと二、三十年すると、そういう子どもさんたちが大人になられて、きちんとした、そういうものができ上がるのかなあとと思っています。

○池田委員長

ありがとうございます。それではちょっと時間も来ていますので、後でまた意見交換は行いたいと思いますが、その前に協会さんのほうから、視覚障がいの疑似体験ができる器具を準備していただいておりますので、体験をさせていただきたいと思いますが、ここで委員の皆様にお尋ねですが、まず、委員の皆様には体験をしていただきますが、そのあと、せっかくの機会ですので、傍聴者の方などにも、体験をしていただきたいと思います、いかがでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

それではそのようにしたいと思います。なお、器具の数に限りがありますので、委員以外の方は4名まででお願いしたいと思います。準備がありますので、しばらく休憩します。

◎午後2時47分～午後2時55分 休憩

○池田委員長

それでは準備ができたようですので、委員の皆さんは後ろのほうに移動していただいて、そちらのほうで体験をしたいと思います。

◎（疑似体験）

○池田委員長

それでは、これまでの全体的な振り返りとして、これからまた意見交換等あればやっていきたいと思いますが、何かお気づきの点、御意見等ございましたら手を挙げていただきたいと思います。

○山下明子委員

今日傍聴のほうに、盲学校の保護者会長さんもみえているんです。ちょっと今、ちらちらとお話を聞いていたのですが、視覚がい害と同時に、ほかの障がいも含めての重複障がいをお持ちのお子さんとかいらっしゃるし、だから、そのコミュニケーションをとっていく上で、どういうことが必要なのだろうかとかいうあたりを皆さん、どんな考えていらっしゃるかなあというのをちょっとお聞きできたらと思うのが一つと、もう一つは、ちょっとさっき質問しかけていたのですが、まちを歩いているときに、こんなふうに声をかけてほしいとか、これをやっちゃだめだよとか、さっきのピーちゃんに対応するときのこととかも含めてなんです、そういうことも少しお話ししていただければと思います。

○佐賀市視覚障害福祉協会

重複障がいに関しては、昔も今もなんです。副会長が言ったように、以前は血族結婚みたいな形で、いとこ結婚とか、結構多かったのです。クラスの中の3分の1がそういう感じの方たちでした。ですから、一つの障がいだけじゃなくて、重複障がい——、例えば、下半身、下肢の不全、麻痺とか、それから、知的障がいとの重複、それが1番多かったです。知的障がいとの重複の方が多かったです。子どもたちですから、もう本当に普通に対応するのはですね。機嫌が良かったら一緒に行こうか何とかと言うけど、機嫌が悪くなったら、ばかとか言って、そういう特別な対応はしてなかったし、先生方も特別な対応は……、ただ、興奮しやすい子は、なるだけ興奮させないようにとか、そういうことは、配慮されてみたいです。今も佐賀県のほうの一つ、聴視覚障がい者、要するに、盲聾という方たちも入っておられます。そういう人がその視覚連の何かに出てこられることは、今のところないのですが、ほとんどボランティアさんが携わっていて、要するに、自分の意思を言ったり、人の言うことの意味ができたりする人が、ちょっと会員さんが何人いらっしゃるか分かりませんが、2人だけいらっしゃるそうです。僕らも希望して、そういう人たちと何か交流を持ちたいので、まず、その……、僕らもはっきりとわからないんです。ボランティアの方たちと、まず交流しよう、交流しましょう、それで、やっぱり最終的にはそういう会に、そういう盲聾の人も来られるような形にできたらいいよねっていう話をしてい

たら、コロナのこういう状況で、全然動けないっていう状況が今とかそういうことなんですね。声掛けですね。俗に言われている。お困りですかとか、お手伝いしましょうか、と言っただけだとありがたいのですが。やっぱり僕らもある程度緊張して歩いています。だから、側で言われても、自分に言われているかどうか非常に判断しにくいので、軽く肩にぽんと触れてお手伝いしましょうかとか、それよか白杖の方お手伝いしましょうかとか、白杖、だいたい肩か何かになんかちょっと触れて、手伝いすることありますかと言っただけだと、1番ありがたいのかなと思います。このコロナ、また要らないことをしゃべりますけど、コロナでやっぱり人が出歩かなくなりましたし、声をかけていただける回数がすごく減りました。中には、これ、つまんで。こっちですか、どこ行くんですか、ここに行ったらこうつまんでこれ、行けたので、お礼は一応申しましたけど、ちょっと非常に複雑です。やっぱり人としてっていう部分でちょっと、うーんと思います。ですから、できたらこういう時期だから、密接っていう関係になるので、僕らずっとこの1年、密接、密接と言われて頭が痛かったのですが、できたらそういう、腕を使わせていただく、肩を持たせていただくということができたら、ベストかなと思います。ただ、声をかけていただく、ちゃんと合図をしていただけるといいですね。

○川崎委員

会長さんから言われた件に関して、私のちょっと、私の友達の一級下が……、名前言われんですけどね。20代のときにちょうど視野が狭くなって、それがちょうどその人は私の友達で、1級下で野球部つくったわけですよ。そうしたところがバッターボックスに立っておったところが、1塁に行くのが3塁にかけていったわけですよ。それでみんな冗談やろうと思うところが、その時にね、呼んでから何でこがんことをしよっていうところが、実はもうね、視野が狭くなってあと20年30年したらね、もう多分目が見えなくなるだろうと告白したわけですよ。その方が、ちょうど、もうやっぱり20年、ちょうど30年ばかりしたらもう、目が見えなくなって、奥さんがちょうど盲導犬に失礼ですけど、奥さんがずーっと脇におって、肩に手をやって、ずっと移動して、行きよったわけですよ。その中でやっぱり今言われるように、ちょっとした肩とか、いろんなねアイデア、手助けがあったらなということが、ちょっと私自身もその友達のこと今思い出しましたので、ちょっとまた感じたことをちょっと言わしていただきたいと思います。

○佐賀市視覚障害福祉協会 声掛けと、重複……。さっき言われたことなのですが私も盲学校にいたときに、やっぱり視覚障がい者じゃなくて、重複の方もいらっしゃったんですけど、その子がすごく歌が好きだったんですよ。そのときの、はやりの歌を歌うのがすごく好きで、歌ってあげるとすごく喜ぶというか、そういう子どもさんだったのですよ。同じ寄宿舎の部屋で一緒だったのですが、すごく大事だなと思ったのが、やっぱりこう共有する気持ちを共有する。相手が何を好んでいるとか、どういうことに興味を持っておられるとか、やっぱり、必ずいらっしゃると思うのですよね。だから、そこを知ると

ころからかなあというふうに思っていました。だから、声掛けはですね、やっぱりこう、声を掛けていただくと、やっぱり視覚障がい者……。私の配偶者も全く目が見えないのですけど、私も弱視で、2人でいると、やっぱり何が1番うれしいかというたら、声を掛けてもらうこと、夫婦でもそうですし、もちろん道を歩いているときでも、何か困ってらっしゃるようだなあと思ったときに、自然体に、何か大丈夫ですか、どうしましたかって、言って声を掛けることが、やっぱりすごくうれしい。ただやっぱり、わっ、とか、何とかさんっ、とか、いきなり言われるとドキッとするから、そこは、皆さんの配慮で声を掛けていただくことがうれしいかなあ。逆パターンが、ちょっとすいません、ちょっと申しわけないです。逆パターンがあつてですね、私に息子が1人いるのですけど、健常者なのですけど、息子と私と配偶者と友達と4人でちょっと外出していて、友達は全然目が見えなかったのですよね。その友達が車でロッカーを探していたのですよ。そのときに、女性の方が友達に、何かお手伝いしましょうかと、声を掛けてくれたことがあって、私はもう自分がいるから大丈夫と思って、いや、大丈夫ですよ、と言って、女性の方を否定してしまったのですよ。そしたら、息子から怒られて、お母さん、そういうときは絶対ね、受け入れんと駄目と言われました。声を掛けられて、何かしましょうかというときは、視覚障がいのある立場だったら、これ探しているのをお願いしますという気持ちがないと駄目と、息子から私のほうが怒られて、そのあと、その友達にもしかして良い縁があったかもしれんと言われて、もしかしたら先につながるかもしれんやっつとか、冗談で言われたのですけど、そういうことが大事っていうことを、息子に教えられた経験があります。

○永渕副委員長

聴覚障がいの団体の話をして、今日は先ほども質問した訳なのですが、ひとつやっぱり、我々が近くあるというのが、障害者スポーツ大会を佐賀がもうすぐ受け入れるというところがあつて、そういうところも加味して、政治的なところで言うと、何かこうそのときに変化を生むことができないかとかも考えるわけですね。例えば、先ほどもユニバーサルスポーツクラブの話とかもしていただいた部分もありました。そういう意味では、そういうことをする上で、何かこういうふうなことが今後スポーツ界、できないかとか何か、そのあたりをちょっと教えていただければと思います。

○佐賀市視覚障害福祉協会

今、自分たちが実際にアスリートクラブの練習をさせていただいたのは森林公園で、そこまで行ってから、ランニングしたりなんかしていたのですけども、やはり同じように視覚障がい者ができるスポーツのところを、総合グラウンドで――、今、サンライズパークになっているけど、そこが使い勝手がいいようになってほしいなあって思っています。それで、外側のランニングコースも、せっかくしてあるので、もうちょっと広くせんと私たちは2人で1人なので、これはやっぱりぶつかって何かする可能性があるんで、私たちの指導している先生自体もそれを怖がって森林公園になったんです。だからそこら辺をしていただ

きたいなと思っています。私も今度佐賀であるので、それまでは大会の1人参加を目標にして頑張っただけで今でもやっているのですけどね。そういう人たちが多分増えてくるのじゃないかなと思いますよ。そういうふうにしてあげれば……。

○川崎委員

一つだけ伺いして。経験ちゅうよりか、今こういうに温暖化になって、いろんな災害等々があるのですけど、1番困ったときとか、また台風とか、津波とか、水害等々の来たとき、やっぱり心配事とか、よければこういうことを行政にしてもらいたいとか、いろんな考え方があるだろうと思うですから、よければそこనికిを考え方と、今後こういうようなことをしてもらいたいとかあれば、教えていただきたいと思います。

○佐賀市視覚障害福祉協会

去年初めて台風10号でしたかね、あのときに新栄小学校のほうに避難をしたのですけれども、そこで非常に困ったちゅうか、家内がいたので、別に困りはしないのですけど、1人でとか、弱視っていうか、盲人ばかり2人で行ったらどうなっているのかなというのが一つの疑問が起きました。なぜかという、受付が中のほうにあるわけですよ。外じゃなくて、駐車場のところじゃなくて、雨が降ったりなんだから、そこまで行くのにどこにどういったらいいのかっていうのは、一つわからなかったのですよね。それと、連絡先がないので、民生委員からは、前の日に市役所に聞いたら、新栄小学校に3時に行けますよということやったのですけど、その日になったら、12時に開いていますから行っていいということやったのですけど、その、もし一人で行った場合にどうしたらいいのか、連絡先がないので、新栄小学校は閉まっているのですよね。それで、役所の人たちが受付をしていると思うのですよ。それで、そこが一つ困ったっていうのと、それと今度部屋に連れていってもらったときに、1階が空いてないので2階でもどこでもいいですかと、いいですよという、これはもう、僕なんか歩けるのでどこでもいいのですけど、トイレに近いところをお願いしますということ、ただ頼んだだけですけども、やっぱりこの1人で行ったときとかあるいは盲人ばかり、夫婦の場合はどうなっているのかというのが何かちょっと不安で、それかっというて受付の人もそがんいっぱいはいないみたいやったので、多分ぎりぎりいっぱいじゃなかったのかなと思うので、それと市役所としては、何か障がい者はほほえみ館のほうに決まっていたという話も聞いたことあるのですけど。そこに行くためには僕たちは、僕の場合は、遠いから。タクシーも下手すぎ通らないと言われたのでね。早く予約して、もう10時ぐらいに予約して来てもらったのですけど、それでも帰りは、逆に7時頃には、もう台風があれしたので帰っていいよということで帰ったのですけど、今度はまたタクシーが全然動いてないということで歩いて、何とか近くで帰ったんですけど、これがほほえみ館やったらどうなのかなとかいう感じがあるので、やっぱり障がい者の近所にしてもらおうということ、普通、大体は公民館ですよ。コロナの関係で、多分学校に変わったと思うのですけど、逆に今度は台風だけならいいけど、大水の場合は佐賀

市の場合は、公民館は浸かるわけでしょ。だから、やっぱり学校になるので、またこの密室、コロナの関係で、体育館じゃなくて、各部屋のごったですもんね。それで、体育館やったら逆にあの駐車場、まっすぐ体育館に行けばいいので、いいけど受付がね。そこのへんははっきりして、連絡先をもしよかったら、民生委員ぐらいには知らせてほしいなと思っているのです。

○池田委員長

もう大分、ちょっと予定していた時間きましたけど、ほかによろしいですかね。今日は急遽、視覚障がい者の皆さんに来ていただいて、いろんなお話を聞くことができました。これから私たちもコミュニケーション条例ということで、執行部のほうに提案をしたいというふうに考えておりますので、そういった意味では今日の話を参考にしながら、これから取り組んでいきたいというふうに思っております。だいぶ時間も来ましたので、ここで最後に、永渕副委員長のほうから閉会のあいさつを行いたいと思います。お願いします。

◎永渕副委員長挨拶

○池田委員長

ありがとうございました。これをもちまして、佐賀市視覚障害者福祉協会の皆さんとの意見交換会を終了したいと思います。大変ありがとうございました。お疲れさまでした。